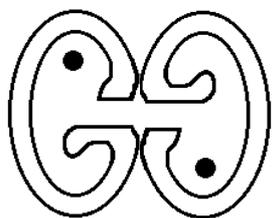


日本双生児研究学会ニュースレター



《第 31 号》

Newsletter of Japan Society for Twin Studies

2002 年 6 月発行

目 次

日本双生児研究学会第 17 回学術講演会のお知らせ		2
自由集会と体重解析で多胎児支援に貢献できたか (2001 年 10 月 20 日, 第 14 回双生児研究会での講演記録)	加藤 則子	4
第 60 回日本公衆衛生学会自由集会 「多胎児を産み育てる家庭への保健サービスを考える集会」報告	加藤 則子	7
多胎児育児支援グループの現状と行政による活動の周知度	天羽 幸子	9
多胎児支援グループのためのワークショップ (2002 年 1 月 26 日, 日本双生児研究学会第 16 回学術講演会ワークショップ)	天羽 幸子	12
日本双生児研究学会・国際双生児研究会議のあゆみ	浅香 昭雄・今泉 洋子	14
平成 14 年度日本双生児研究学会総会議事録・第 1 回、第 2 回幹事会議事録		18
平成 13 年度会計報告・平成 14 年度予算案		19
次回研究会のお知らせ (日時: 2002 年 9 月 21 日, 13:30~16:30 場所: 東京大学医学部教育研究棟 講師: 大木秀一氏)		20
編集後記		20

会員募集のお知らせ

入会を希望される方は郵便振替用紙に口座番号(00190-7-185311)、加入者名(日本双生児研究学会)をご記入の上、年会費(3,000 円)をご送金下さい。また、通信欄に所属・所属の住所・電話番号・FAX 番号・E-mail 等をお書き添え下さい。

〒108-8345 東京都港区三田 2-15-45
慶應義塾大学文学部安藤研究室内
日本双生児研究学会事務局
電話: 03-3453-4511 [内線 23109]
FAX: 03-5427-1578
E-mail: juko@msa.biglobe.ne.jp

日本双生児研究学会

第17回学術講演会のお知らせ

日時： 平成15年1月25日（土曜日）午前10時～午後5時

会場： 大阪市立総合医療センター さくらホール
〒534-0021 大阪市都島区都島本通2-13-22
電話 06-6929-1221 FAX 06-6929-1090
大阪市地下鉄 谷町線 都島駅下車 3分
新大阪からは 地下鉄梅田駅 または JR大阪駅で 乗り換え

【プログラム】

- 1 一般演題
- 2 シンポジウム
 シンポジウム 1 「多胎妊産婦を支える」
 シンポジウム 2 「多胎サークルの将来像」

演題の申し込みは、一般演題・シンポジウムの別、演題名、発表者（全員）、600-1000字程度の抄録（A4 1枚に納まるように）、連絡先（住所 電話 FAX E-Mail アドレス）を添えて郵便またはFAX またはE-Mail にてお送り下さい。

一般演題・シンポジウムとも公募です。シンポジウムをご希望の方はその旨お知らせ下さい。シンポジウムへの採否はお任せ下さい。

原則としてスライドを使用します。PowerPoint・ビデオなどの使用可否については、後日連絡します。希望者は事前にお知らせ下さい。

【締め切り】

平成14年10月20日（必着）

【抄録送り先 および 本件に関するお問い合わせ先】

大阪府立母子保健総合医療センター 産科 末原則幸
〒594-1101 大阪府和泉市室堂840
TEL 0725-56-1220 FAX 0725-56-5682
E-mail suehara@mch.pref.osaka.jp

（お願い）

会場は大阪市立総合医療センター（大阪市都島区）ですが、連絡先は大阪府立母子保健総合医療センター（大阪府和泉市）ですので、お間違いのないようお願い申し上げます。当日以外の大阪市立総合医療センター（大阪市都島区）へのご連絡はご容赦下さい。

(解説)

下記のようなシンポジウムを企画しております。

シンポジウム1・シンポジウム2 共に3～4名のシンポジストを募集します。
奮ってご応募下さい。

シンポジウム 1 「多胎妊産婦を支える」

多胎妊婦・胎児・新生児の命と健康を守るために、妊娠中（時には妊娠前から）にどのようなことをしたらよいか。

テーマの例

- 1 多胎の母と児の命を守るための妊婦管理
- 2 多胎妊婦への妊娠中の多胎情報の提供、多胎教室
- 3 妊娠中からの多胎の仲間づくり
- 4 妊娠前からの多胎カウンセリング
- 5 不妊治療前カウンセリング
- 6 多胎妊婦・新生児をケアするための地域周産期医療システム
- 7 不妊治療担当者と周産期医療関係者との連携
- 8 多胎育児情報について（本、インターネットなど）
- 9 保健所などでの多胎支援
など

シンポジウム 2 「多胎サークルの将来像」

多胎サークルの更なる発展を願って、関連する人々・機関との連携を探る

テーマの例

- 1 多胎サークルの現状
- 2 多胎サークルの問題点
- 3 児に障害をもつ多胎児と親への支援
- 4 多胎の親たちへの心理・教育支援 恒常的な支援は可能か
- 5 多胎ヘルパーサービスの現状と問題点 将来
- 6 多胎サークルと医療機関との連携は可能か
- 7 多胎サークルと医療機関との連携の将来への展望
- 8 多胎クリニック構想
- 9 多胎育児支援電話相談
など



自由集会と体重解析で多胎児支援に貢献できたか

(第14回双生児研究会 2001年10月20日)

国立保健医療科学院 加藤則子

多胎児領域の研究活動も、二つの要素を加味しようと欲張って、ときどき動きが取れなくなります。二つの要素とは..

『二つの要素

小児保健の研究で、その両方をカバーできなくて困っている二つの領域がある。一つは学術的な興味であり、もう一つは実際の育児や保健にとって必要なことがらだ。

双生児に関するテーマに言い換えれば、双子のお母さんの声をすいあげ、どんな保健サービスが必要かを考えていくやり方と、発育や疫学のことで双生児を対象としてどちらかというカチツとした学術議論をしてゆくやり方である。どちらの活動も頼まれたり誘われたりするが、前者は後者に比べて人との関係というとらえどころのない要素が入る。両方やればいいじゃないですかと、ある尊敬する先生に言われて勇気を出して二足の草鞋を履いている。育てる自分と究める自分の間で悩んだのだから、せめてこれくらいの気力は持ちたい』

子育ても仕事も捨てられない メディサイエンス社より

I. 自由集会での支援

支援方面の活動の一つは日本公衆衛生学会の自由集会の開催です。これは、大阪大学の早川教授と共同で10年間に亘り開催を続けているものです。集会の内容の変遷を振り返ることにより、多胎児支援の実際と課題がどう変化したかを理解することが出来、今後の動機へとつなげることが出来るかも知れません。

日本公衆衛生学会自由集会とは、毎年秋に3日間に亘って開催される日本公衆衛生学会の会場で、夜間は学会のプログラムが無いので、その時間帯を活用して、公衆衛生的な意義の深い集会に自由に使ってもらおうとするものです。毎年、2夜合わせて数十の集会が開催されます。自由集会が公衆衛生学会で試みられて以来、『多胎児を産み育てる家庭への保健サービスのあり方を考える集会』は、毎年、開催の応募をしております。

会場費がかからないということで開催しやすいほかに、全国から保健従事者が集まる学会とタイアップしているため、集会によってなるべく多くの保健従事者にこの問題を認識してもらおうというのねらいの一つです。

以下、それぞれの集会でのおもなスピーカー（当時のご所属）と、集会の様子について、かいつまんでご紹介します。

第1回（東京、1992）

レクチャー 今泉洋子（人口問題研究所） 浅香昭雄（山梨医科大学） 天羽幸子（ツインマザーズクラブ）

フォーラム 石井トク（千葉大学） 金田治也（尼崎東保健所） 早川和生（近畿大学） 舘ヒロ子（中野北保健所） 武藤かおり（東京医大）

とにかく立ち上げてみよう、早川先生からお話が出てました。東京開催のためお手伝いしました。研究は随分進んでいるが、公的支援はまだこれからなの分かりました。保健所長さんが

乗り気だと進むということも、分かりました。問題意識の共有に大きな意義があったと思います。

第2回（北九州、1993）

レクチャー 阿部和彦（産業医科大学）

シンポジウム 加藤則子（国立公衆衛生院） 柳井富美子（宗像市） 森定一稔（大東保健所）
下川浩（エンゼル病院） 石井トク（広島大学）

地元の保健所に活動がないか、懸命に探しました。倫理という面に焦点が当てられ、以後この集会で、しばしば取り上げられています。

第3回（鳥取、1994）

清水美登里（厚生省） 浅香昭雄（山梨医科大学） 横山美江（近畿大学） 石井トク（広島大学）
舘ヒロ子（中野北保健所） 吉尾由美子（大曲保健所）

障害と倫理の課題を引き継ぎました。保健所等からの報告については、昼間の公衆衛生学会の方で演題発表をされた方に、夜も発表していただけるか、依頼してみました。

第4回（山形、1995）

末原則幸（大阪府立母子保健総合医療センター） 高階千江子（大曲保健所） 石井トク（広島大学）

秋田の五つ子対策は続けて3回取り上げました。4，5胎だけでなく、双子三つ子も大変なのだ、確認しました。生殖医療のあり方についても、議論しました。

第5回（大阪、1996）

浅香昭雄（山梨医科大学） 山本博美（安城保健所） 飯吉令枝（新潟県立看護短期大学）
服部律子（京都大学医療技術短大） 横山美江（近畿大学）

記念すべき第5回は関西双子研究会のお膝元です。保健所活動も盛んなところですが、昼間の発表がある場合、それを繰り返していただきました。継続の不安はあるけれど、親の会と一緒にやってゆけばいい、まずは立ち上げてみよう、という議論になりました。

第6回（横浜、1997）

野口恭子（広島大学） 稲垣美幸（中野北保健所） 三谷泰子（青梅市） 橘薫（金沢、親の会）
高里眞美（東京、親の会） 久保田奈々子（埼玉、親の会）

親の会の代表の方にもお願いしてみました。行政側と自主グループ側の受け止めの違いが分かりました。

第7回（岐阜、1998）

加藤則子（国立公衆衛生院） 横山美江（滋賀医科大学） 金山学（名古屋市児童福祉センター）
矢野恵子（三重大学）

障害がテーマです（早川先生は難しいテーマにも意欲的です）。シリアスでした。

第8回（別府、1999）

早川和生（大阪大学） 伊東直子（西南女学院大学） 平野真澄（日田市） 塚本友子（熊本、親の会）
吉井一実（福岡、親の会） 稲田純子（福岡、親の会）

4月には厚生省に多胎児支援の要望書が出されました。検討会の様子について、早川先生が発表して下さいました。自治体は活動していても、忙しくてなかなか話に来てもらえません。第2

回北九州にも出席の方がいてなんだか嬉しかったです。親の会の、行政への訴え方が上手になったと思いました。

第9回（前橋、2000）

石井トク（岩手県立医大） 狩野まゆ美（三つ子親の会） 久保田奈々子（埼玉親の会）

厚生省からハンドブックが配られた年でしたが、まんべんなく行き渡っていないことも分かりました。倫理議論、健在です。（お陰様で勉強になります） 地元是三つ子の会がありました。

第10回（高松、2001）

大西鐘壽（香川医科大学） 山本睦子（大阪市） 亀山ひろみ（岐阜県） 多田羅佐代子（香川、親の会） 平林千帆（徳島、親の会）

保健所でも、取り組みはあったのですが、移動あり業務ありで、来てもらえません。さぬきツインクラブはリーダー回り持ちなのが印象的です。小野寺さんをお願いして、MLでアナウンスしていただいたところ、反響が大きく、IT時代であることを、実感しました。

集会をただけでは、どれだけの効果が現れるかは疑問ですが、状況が変わっていることはよく分かります。いろいろな出会いを楽しんでいることもまた事実です。サービス側と支援を望む側との橋渡しとして、機能してゆけたらと切に願います。

II. 体重解析等がいかに支援に貢献しうるか？

双子、三つ子用の出生体重の基準が明らかになっていないため、不要な誤解や不安の種になっていると思います。厚生労働省の出生票データを用いて、基準を作成してみました。

結果の概略：口動態調査出生票・死産票の昭和63年から平成3年までの磁気テープ（を用い、生まれたとき、子の住所、父母の年齢、妊娠週数により、第1子、第2子とも生産の同一妊娠による双胎32,232組を同定した。男女別初産経産別妊娠週数別出生体重と厚生省研究班（1994）の単胎のそれを比較すると、34週までは男女とも0.1kg程度小さく、その後差は大きくなり、42週では0.5kg位に差が開いていた。全妊娠週数において、経産では初産より150g～200g大きい値を取っていた。作成された10パーセンタイル曲線よりも小さいものの割合を、出生順位別、同性ペア異性ペア別に求めると、同性ペア第2子で10パーセンタイル未満となるものの割合が大きいことが分かった。

これは、公衆衛生学会雑誌（平成14年4月号）に公表させていただきましたが、これの前のバージョンの解析結果をビネバル出版が単行本（「ふたご・みつごは小さく生まれて大きく育つ」）に企画して下さったのが大変ラッキーでした。双子、三つ子の発育についての正しい知識の普及に役だったからです。たまたま出かけた現場で保健師さんから感想を聞くなど、手応えも充分で嬉しいです。

体重解析ではありませんが、似たような統計資料を使って、性別組合せ別の死亡率の変化を見えています。動機は、生殖医療の進歩普及に伴ってこれによる多胎児の出生が増えているが、これらの子どもが果たして安全な経過を辿っているか、死亡率や、妊娠期間、出生体重などの観点から、間接的にでも推測できないか、というものです。

結果の概略：人口動態統計出生票・死産票・周産期死亡票の磁気テープ(1975-1994)から、生まれたとき、子の住所、父母の年齢、妊娠週数により同一妊娠による多胎の組を同定した。多胎児の急増の起こりはじめる1984年と、その10年後の1994年で、性別の組合せ別に死亡指標等を比較した。異性ペアの場合、同性ペアに比べて、(1)妊娠期間がより短くなっている (2)出生体重がより小さくなっている (3)妊娠週数の割に出生体重が小さい (4)周産期死亡率・死産率・早期新生児死亡率の減少が遅い (5)1500g未満・1000g未満出生児の割合が増えが大きい 等が分かった。

異性双胎の死亡動向がどうもあやしいぞ、という結果なのですが、生殖医療による出生児→二卵性双胎→異性双胎 と、いくつもの間接的な推測を重ねての苦しい議論で、それというのも資料の性質上の限界から来ているわけです。それと、これを書きながら、この推論には大きな穴があったことに気づきました。それをふくめての解析結果をまた、なるべく早く学会で報告しなければと思っていますところですが。

どちらの方面での成果も、まだ微々たるものですが、多くの方々のご指導に対し、感謝の念に堪えません。残された年月で、出来ることを努力してゆきたいと思えます。



第60回日本公衆衛生学会自由集会

「多胎児を産み育てる家庭への保健サービスを考える集会」報告

国立公衆衛生院母子保健学部 加藤則子

日 時： 平成13年10月31日(水) 18:00~20:00

場 所： 高松市市民文化センター第1集会室

代表世話人： 大阪大学教授 早川和生

講演

1. 「母子相互作用と心」

大西 鍾壽 (香川医科大学名誉教授)

100年以上前、日本で多くの遺跡を見つけたアメリカ人学者モースは、「日本その日その日」という著書の中で、「日本人は育児文化を完成させた民族だ」と述べている。これは、育児の基本が触れ合いであるということが、充分踏まえられていることを意味している。人間の脳にある内側視索前野という部分は、母性本能の中心であると考えられているが、これは脳の中で、位置的に性行動の中心に極めて近い。内側視索前野の行う母子行動はほ乳類として共通のことであり、根元的な生存のつながりと言うことができる。

2. 「淀川区の『双子の集い』の発足と活動」

山本 睦子 (大阪市淀川保健センター)

「双子の集い」を支援する立場として、案内を保健センターから出している。保健センターの名前で、安心してもらえる面がある。対象限定では予算が取りにくいので「幼児教室」という名称の事業としている。母が主体となって運営できるよう、打ち合わせの場として、「子育て健康

づくり情報コーナー」を解放している。ニードに対して働きたいが、行政マンの立場では壁がある。せいぜいできて年4回だとか、率直に話している。「子育て支援事業」では1回千円の補助で、おもちゃが買えないのが悩みである。

3. 「多胎児を持つ母親の育児状況と兄弟間の愛情差の有無について」

亀山ひろみ (岐阜県中濃地域保健所)

双子を育てる家庭の継続訪問中、母親が片方がかわいいと思えなく、母親失格ではないかと苦しんでいることを把握。誰にでも起こることではないかと思って話し合いの会を企画したら、愛情の差で悩むに双子の母が10人集まった。それぞれ泣きながら語り、かなり楽になったという。交流会のみからでは十分にニードが把握できないと思い、管内の49組の多胎児の親に聞き取り調査を施行、多くの人に起こりうるのだという認識の普及や、交流会での情報の交換とともに専門家による情報の整理も重要であることが分かった。

4. 「サークルのスタッフとして活動に携わって」

多田羅佐代子 (さぬきツインクラブ)

発足6年目で59組、内三つ子1組、四つ子1組である。岡山の「ふたごぐみ」から香川の人が独立した。会報誌、全体集会、小グループの集会、メール交換等の活動を行っている。サークルの世話人は1年交代制を取っている。1, 2歳児の母が当たることが多い。引きこもっていないで出てきて下さいねと、小さい子の親が声をかけ、同じ人ががんばっている姿にふれると、同世代の友達ができ、親しみを感じて積極的になり、効果がある。会場探しが大変だが、回数が増えれば参加してもらえるチャンスも増えるので、どうにかがんばって探している。行政には専門知識のデータを望む。サービス事業があるのを知らないでいることがあるので、周知徹底して欲しい。

5. 「多胎児サークルの立ち上げにかかわって」

平林 千帆 (ふたごっ子くらぶ)

平成9年4月から4年目にある自主サークルである。13家族14組の双子。0歳から小2と年齢層も広い。情報があるわけではないが分かってくれる人と話ができる。保健センターでもすでに取り組みされていたが、仕事が平日あって集まれない人が多かったことで、土曜に集まる自主サークルとして新たに発足。集まりは公的な施設を利用している。お金はなるだけかけないようにして、ぎりぎり工夫している。動ける人が動いて楽しくやろうと、時間のやりくりをしている。土曜なので、父親の参加もみられる。

自由討論

双子の年齢が高くなるとサークルに参加しにくくなるという事は必ずしも無い。むしろ、大きい子に双子の世話の手伝いをさせると、赤ちゃんも機嫌がいい。助成金は、対象限定では取りにくいので、一般的な育児サークルとネットワークを作って、他のサークルに引っかけて一緒に事業として申請してゆくと、助成が通りやすい。

多田羅さんの世話人交代制のお話を、興味深く聞かせていただきました。また、平林さんは、半日つぶして、徳島県の南の方から来て下さいました。保健所の保健婦さんも早退して、車を運転して連れてきて下さったのです。それに感動して、学会参加中の同保健所長さんに申し上げたところ、「人情で助けてますよ。行政の取り組みにも力になってくれましたから。こっちの方では、助け合いは普通のことですよ..」と。何か、心が温まる高松訪問でした。

多胎児育児支援グループの現状と行政による活動の周知度

ツインマザーズクラブ 天羽幸子

1月に開催された第16回日本双生児研究学会のシンポジウムのために日本全国の多胎児支援グループの現状を調査し報告した。

最近10年ばかりの間に地域限定の小さなグループは80ほどになる。

私は地方での集会をツインマザーズクラブと合同で行った機会などに、そのミニグループのリーダーたちがボランティアとしての活動に疲れ、活動の継続に不安をもちやす人が多いことを感じた。

そこで昨年9月活動の現状を知るための調査と、1999年に私達が要望して実現した厚生労働省の事業がふたごのお母さんたちにどの程度知られ、役立てられているかを調べた。

《調査方法》

80グループに調査票を送り、61グループから回答をもらった。(回収率75%) この中に10か所公的機関があったが、再度の依頼によっても回収は低く(50%)、すでに活動していないところもあった。

《調査票の構成》

グループの発足のきっかけ、活動内容、会員の動向、中心的リーダーの現状、活動継続の問題点、公的機関とのかかわり、行政による活動についての周知度などを調べた。

《発足について》

①時期 図1にみられるように、不妊治療の成果によって、多胎児出産が急増した1987年以降、2、3年して、その子どもたちが2、3歳になり、少し時間にゆとりを持つことができるようになって母親たちが、いっせいに各地で立ち上り、グループを発足させたことがわかる。

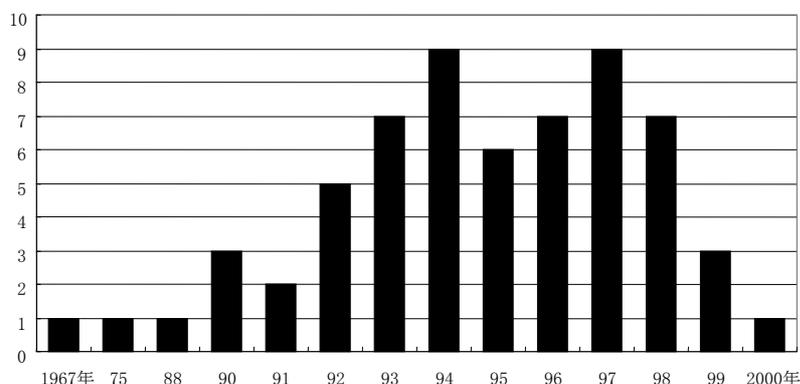


図1 発足の時期

②発足のきっかけ 図2にみられるように、出産の時病院で知りあったとか、買い物で見かけた母親たちが、他の人はどのように子育てをしているのかを聞いてみたいと自発的に立ちあげたものが68%、公的機関が母親教室をひらき、しばらく様子を見てリーダーになりそうな人を探し、自主的活動に移行させたもの25%、公的機関が主として運営しているもの7%で、母親の手で自発的に発足したものが多い。

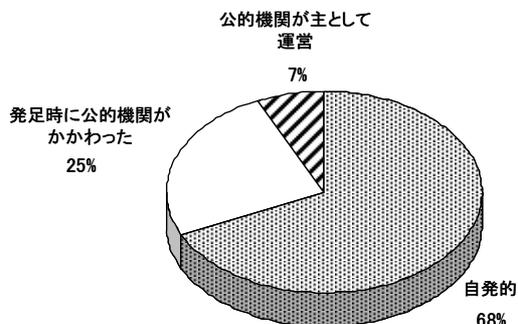


図2 発足のきっかけ

《会員について》

①会員数 60人までのグループが70%をしめている。

②会員の増減 図3にみられるように、設立して10年くらいのグループでは会員のもっとも多い時に比べて減少傾向にあるもの57%、現状維持のもの（設立して5年以内のものが多い）32%、リーダーが交代して会員数の移動がわからないもの7%となり、会員数がふえつつあるというグループはないことがわかった。特に公的機関が最初に始めたグループの方が会員の減少率が高い。

③グループの最多の子どもの年齢は3歳までで61%を示している。

④平均在籍期間 入会した会員がグループに在籍しているのは3年、長くて5年である。

⑤退会する時の子どもの年齢は4歳から6歳で、子どもの入園、入学の時に退会する。従ってこのようなグループには乳幼児の育児の折に利用する傾向が圧倒的に多い。

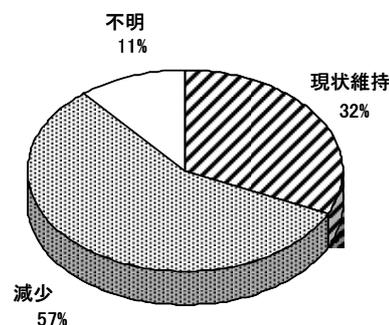


図3 会員の増減

《活動について》

①活動地域 近隣を中心とし、広くて県内に限られるもの90%。

②活動の内容 集会、リサイクル、会報、回覧ノートによる4方面の活動をしているものが42%、このうち集会がもっとも多い。

③会報 5人以内の人が原稿集めから発送まで自分たちの手でやっているところが76%。平均して10頁以内（42%）で、2ヶ月に1回出している。

④集会 1ヶ月に1回～2回集会をしているところが53%、そこに参加する子どもの年齢は3歳未満が90%である。集会の内容は子どもを遊ばせながら、お互いの悩みを語りあうことが87%である。年に1回くらいは講師をたのむこともあるのだが、悩みだけではマンネリにおち入りやすい。

《中心的リーダーの現状》

発足時のリーダーがそのまま現在もかかわっているところが60%、40%は2年くらいの期間で交代している。

役割分担をし、ひとりの人に負担がいかないようにしているが（48%）、中心的役割をもつ人への負担は大きい（68%）のが現状である。

《活動を継続する上での問題点》

集会への参加者の減少、会員の持つ悩みに年齢差が出て対応が難しくなったということを指摘する声もある。もっとも大きい問題点は、会員の積極性が乏しく、後継者が育たない（50%）ということであった。公的機関の支援がほしいという期待もあるが、参加している会員が子育てのノウハウを聞くだけという受け身の姿勢であること。自分たちの活動として次につなげる気持ちがないということがリーダーたちにこのような活動の継続に精神的負担を感じる中心的原因と考えられる。

《公的機関とのかかわり》

ずっと自主的に運営しているところが46%、設立の時公的機関がかかわり、程度の差はあるが、今もかかわりがあるところは39%、かつてあったが今はないところが15%ほどで、半分くらいは公的機関とのかかわりを持っている。

しかし現実のかかわり方は、多胎児のお母さんを紹介してくれること（70%）が多く、会場や託児ボランティアの紹介などは少い。

特に公的機関の担当者が転勤になったりすると、支援の内容もすっかり変わってしまうという不満が多くみられた。

《行政による活動の周知度》

私たちは1999年厚生省に多胎児の育児支援を要望し、その中、次の2点が事業として実現した。これについて、お母さん達にどのように役立てられているのだろうか。

①小冊子「ふたごの育児」について

私たちが加わって作成し、2000年3月全国に6万部を配布した。

この事実については89%の人が知っていた。しかし1年間でなくなったとのことで2001年第2刷を母子保健事業団から1部350円で販売していることについては、知らないという人が74%である。

小冊子の内容についてはコンパクトによくまとまっているという意見が多かったが、妊娠中にほしかったという声も多く、私たちの希望するように、2冊目の母子手帖をもらう時に入手できるようになるとよいと思う。

②双生児家庭訪問事業について

3歳児未満の多胎児の家庭のベビーシッター代として年間9千円を補助するという制度で、厚生労働省は12000家庭分の予算をくんでいるということである。

この事業について、知っているものは76%、しかしベビーシッターをこの制度で依頼したことがあるものは、わずか6%で、ほとんど利用されていない。

従って平成13年4月から翌年1月までの申請件数は347件、使用件数156件（平成14年3月、申し込み機関である全国ベビーシッター協会の報告）というように、利用する家庭は少い。

その原因については①これを利用できるのは社会保険加入者のみであること。

②母親の「リフレッシュ」ということで、母親は外出しベビーシッターは家庭だけでしか働けないということになっていた。

③この利用するベビーシッターは、全国ベビーシッター協会という厚生省の外郭団体に登録しているところのベビーシッターに限られ、特に東北、北陸などには、一か所もない県もあった。

というわけで、年1回9千円という僅かな額であるのに、「絵にかいた餅」という感じの制度になっていた。

これを改革しようと厚労省に足を運んだが一度決まった枠組みは3年間は変わらないといわれ、私は日本の行政の取組みに失望した。

ところが、或る会合で厚労省の児童家庭局長に直訴する機会があった。その結果「母親のリフレッシュ」という枠はなくなり、母親はベビーシッターをつれて、子どもとともに動物園に行くことも可能になり、その他かなり改革が行われた。ただちに改めてもらい、大変嬉しく思っているが、上の方に直訴しなくては実現しないということも困ったことである。

《まとめ》

回答のあった61グループのうち将来も安定した活動を継続できると、全体的に考えられるものは9グループほどであった。

このような支援グループの活動は、お互いに悩みを語りあい、自分だけが直面している問題でないということを知るなど、小児虐待の防止にも強い影響力が考えられるので、是非とも支援していきたいと思っている。

もし地域の公的機関が①会場の提供 ②保育ボランティアの紹介 ③専門知識の伝達などを行えば、支援グループも継続でき、また公的機関も費用をかけずに、多胎児の育児支援が可能になるのではないかと考える。

さらにふたごのお母さんたちの援助は子どもが小さい時だけでなく、もっと先に大切なことがあると最近強く考えている。子どもたちは大きくなり二人揃ってうしろも見ずに巣立っていく。その時巣に残されたお母さんたちを「ぬけがら」にしないことが大切である。「私たちはふたごをしっかりと育てた」ということに誇りを持ち、これを土台にして、個々の経験ばかりでなく、少し勉強をして、地域の会合に指導者として加わり、それに生き甲斐を感じてもらえるようにしたいと私は願っている。



日本双生児研究学会第 16 回学術講演会ワークショップ 2002 年 1 月 26 日 15:40～16:50

多胎児支援グループのためのワークショップ

司会 天羽 木村 (ツインマザーズクラブ)

このワークショップの開催について、プログラムにのらず、会員全体に正確に伝わらなかったことは申しわけなかったと思う。

十分な時間がないと考えられたため、次のような印刷物を、参加しそうな会員に配った。これは天羽がミニグループの現状を調査した結果、是非現場にたずさわっている人のなまの声を聞きたいと思ったからである。

テーマ「多胎児支援グループを継続させるためには、どのような援助、方向づけが必要か」

- ①リーダー、役員負担をどのようにしたらよいか
 - ・常任から交代制にうつれない理由など
- ②グループの運営
 - ・会場、保育ボランティアの確保がむずかしい
 - ・公的機関はこのような援助がむずかしいのか
 - ・「お互いのなやみ」を交換するだけよいか?
 - ・地域限定の支援グループは、年少児対象でよいか
 - ・年長児をもつ会員を長く会にとどまらせる工夫
- ③ボランティア精神を次世代につなげるためには

当日の参加者 ツインマザーズクラブ、ふたごっちクラブ、風っ子キッズ、大阪ツインキッズ貝塚、メーリングリスト、淡路のミニサークル、ビネバル出版、志村恵先生 (金沢大学)

ふたごっちクラブ… リーダーの負担がだんだんと大きくなってくると、リーダーシップのある人の場合はうまく盛り立てて行くことができるが、そうでない場合は存続が難しい。

風っ子キッズ… 会員相互の連絡は電話連絡網を利用し、要所要所にリーダーを配しきちんと連絡をまわしている。集会への参加者も毎回 50 組以上を超えている。会報は内容、資質が大事なので今はやめている。スタッフを育てるため、密に連絡をとりスタッフのステップアップとともに、楽しみを感じてもらえる努力もしている。

ツインキッズ貝塚… 地元公民館を中心に子育てサークルが活発な地域である。そういう中でネットワークができていたのでツインの母親同士の活動も始めることができた。

メーリングリスト… 会員数が3000人を超え、スタッフ希望者も多数いて、順調に活動している。

ビネバル出版… ツインマザーズクラブが30年以上続いたのは、強力なリーダーがいたことが大きい。また、メーリングリストは入会のしやすさ、会費が無料であること、そして有能なスタッフがそろったことが成功の理由であろう。小さなサークルについてはリーダーが無理をして過度の負担を感じながら続けるよりは発展的解消をしてもよいのではと思う。

志村先生も同意見であった。

短時間であったため、具体的な課題についてつっこんだ討議はできなかった。①なやみを語りあうばかりでなく、いろいろなイベントを取り入れて、会員相互に楽しめるような機会を持つことも必要であるということ。(但しこれを成功させるためにはかなりな力が必要) ②活動を行っている中心的リーダーが本当にゆきづまった場合には解散という形をとり、次世代が再び開始するのを待つのもいいのではないかという意見があったが、私どもも同感であり、実際にそのような過程を経て、再度復活している地域も少くない。

ツインマザーズクラブは30年以上活動をしているが、戸外での集会である「代々木公園での集い」も、今年は担当地区ばかりでなく、大勢の成長したツインズたちが参加し、アンパンマンのぬいぐるみがファミリーであらわれたりして、ツインズたち自身がボランティアとして手伝ってくれるようになり、長く活動を続けてきたことを大変嬉しく思っている。



日本双生児研究学会のあゆみ

(浅香昭雄 作成)

学会会長

1986 (S61)	第1回設立準備会		
1987 (S62)	第2回設立準備会		
	第1回学術講演会 (創立総会)	井上英二	
1988 (S63)	第2回		
1989 (H1)	第3回		
1990 (H2)	第4回		
1991 (H3)	第5回		
1992 (H4)	第6回		
1993 (H5)	第7回	岡嶋道夫	双生児研究会→日本双生児研究学会と名称変更 (1993. 1. 30)
1994 (H6)	第8回		世話人→会長と名称変更
1995 (H7)	第9回	詫摩武俊	
1996 (H8)	第10回		
1997 (H9)	第11回	吉田啓治	
1998 (H10)	第12回		名誉会員：井上英二、岡田敬蔵、岡嶋道夫、詫摩武俊
1999 (H11)	第13回	天羽幸子	
2000 (H12)	第14回		
2001 (H13)	第15回	浅香昭雄	
2002 (H14)	第16回		

双生児研究会学術講演会一覧

開催日、会場、世話人 (世話人所属) 《ニュースレター掲載号》, 学会内容

- 第1回設立準備会 1986. 11. 29 浅香昭雄・今泉洋子・松井一郎 《NL1号》
第2回設立準備会 1987. 1. 7
第1回 (創立総会) 1987. 1. 7 東京大学山上会館 井上英二
【記念講演】井上英二 「日本におけるふたご研究の歴史」
1987. 11. 20 Kaere Berg 「ノルウェーにおける双生児による成人病—高脂血症と高血圧の遺伝解析」
第2回 1988. 1. 9 東京大学山上会館 吉田啓治 (東京医科大学産婦人科) 《NL2, 4号》
【特別講演】吉田啓治 「双胎妊娠における Vanishing Twin」
第3回 1989. 1. 14 東京医科大学病院 松井一郎 (国立小児病院小児医療研究センター)
《NL3, 4, 5号》
【特別講演】馬場一雄 「日本のスーパーツイン」
第4回 1990. 1. 13 大阪国際交流センター 清水忠彦 (近畿大学医学部公衆衛生学) 《NL5, 6, 7号》
【特別講演】清水忠彦 「疫学領域における試み」
【教育講演】レーネ・ロノウ 「デンマークにおける双生児」

- 第5回 1991. 1. 19 東京医科大学病院 詫摩武俊 (東京都立大学人文学部心理学研究室)
《NL7, 8, 9, 10号》
【特別講演】 詫摩武俊 「心理学における双生児研究」
【招待講演】 Walter E. Nance 「The Detection of Epistasis and Genomic Imprinting by Partitioned twin Analysis」
【招待講演】 Nicholas G. Martin 「Twins, Twinning, Genetics and Environment」
- 第6回 1992. 1. 25 東京大学山上会館 浅香昭雄 (山梨医科大学保健学Ⅱ教室) 《NL9, 10, 11号》
【特別講演】 保志 宏 「個人追跡法による双生児組内差の年齢変化の研究」
- 第7回 1993. 1. 30 新潟大学医学部有壬記念館 飯田 真 (新潟大学医学部精神医学教室)
《NL11, 12, 13号》
【特別講演】 岡崎祐士 「精神分裂病の双生児研究 —長崎双生児研究プロジェクトから—」
【特別講演】 岡嶋道夫 「皮膚紋理の遺伝と発生 —双生児研究から近交系動物への道程」
- 第8回 1994. 1. 23 九州大学医学部同窓会館 中田 稔 (九州大学歯科部小児歯科学教室)
《NL13, 14, 15号》
【特別講演】 角田幸雄 「哺乳動物における双生児産出の基礎的研究とヒトとのかかわりについて」
- 第9回 1995. 1. 21 東邦大学医学部第3臨床講堂 平川 舜 (東邦大学医学部第1産婦人科学教室)
《NL15, 16号》
【特別講演】 高林俊文 「双胎と遺伝」
- 第10回 1996. 1. 27 大阪大学医学部銀杏会館 早川和生 (大阪大学医学部保健学科) 《NL17, 18号》
【シンポジウム】 「多胎家庭の Welfare とケアに関する研究」
- 第11回 1997. 1. 18 東京大学教育学部附属中・高等学校 詫摩武俊 (東京国際大学) 《NL19, 20号》
【シンポジウム】 「思春期の双生児」
- 第12回 1998. 1. 24 山梨医科大学臨床大講堂 浅香昭雄 (山梨医科大学保健学Ⅱ教室)
《NL21, 22, 24号》
【特別講演】 星 和彦 「最近の体外受精の動向 —とくに顕微受精について—」
【特別講演】 青野 透・斉藤有紀子 「減数中絶問題と法思想からみた倫理」
- 第13回 1999. 1. 23 東京医科大学 又吉國雄 (東京医科大学霞ヶ浦病院産婦人科) 《NL23, 24, 25号》
【特別講演】 Robert Derom 「A New Era in Twin Research」
【ワークショップ】 「子育て支援」
【グループディスカッション】 「ふたごの育児」
- 第14回 2000. 1. 22 三重大学三翠ホール 岡崎祐士 (三重大学医学部精神神経学教室)
《NL25, 26, 27号》
【シンポジウム】 「私たちは双生児をどのようにみてきたのか —21世紀を展望して—」
【特別講演】 井上英二 「双生児研究の回顧と展望」
【ワークショップ】 「多胎児育児支援」
【ポスターセッション】

- 第15回 2001.1.27 慶應義塾大学三田キャンパス 安藤寿康 (慶應義塾大学文学部)
《NL27, 28, 30号》
【シンポジウム】「行動遺伝学の現在と双生児研究 ―ヒトゲノム時代の新しい使命」
【ワークショップ】「多胎児育児支援」
- 第16回 2002.1.26 兵庫大学 今泉洋子 (兵庫大学健康科学部) 《NL29, 30号》
【特別講演】Elizabeth Bryan 「The Nature and Nurture of Twins」
【シンポジウム】「わが国における多胎児育児支援について」
【ワークショップ】「多胎児支援グループを継続させるためには、どのような援助、方向づけが必要か」
- 第17回 2003.1.25 大阪市立総合医療センター さくらホール
末原則幸 (大阪府立母子保健総合医療センター) 《NL31号》

双生児研究会一覧

開催日、発表者、題名、《講演記録ニュースレター掲載号》

- 第1回 1995.6.17 岡田敬蔵 (河村 望)
双生児合宿をめぐって 《NL18号》
- 第2回 1995.10.21 井上英二
強迫性格と日本人 《NL19号》
- 第3回 1996.5.25 吉田啓治
不妊治療と多胎をめぐる諸問題 《NL20号》
- 第4回 1996.11.30 天羽幸子
双生児の性格形成 ―彼等を取り囲む環境を追って― 《NL21号》
- 第5回 1997.4.24 岡嶋道夫
皮膚紋理と双生児研究 ―双生児から双生児モデルとしての近交系へ― 《NL22号》
- 第6回 1997.12.6 詫摩武俊
心理学における性格の研究 《NL23号》
- 第7回 1998.5.9 今泉洋子
わが国の多胎の動向および諸外国との比較 《NL24号》
- 第8回 1998.11.21 末原則幸
産科・新生児科で問題になる双胎・多胎 《NL26号》
- 第9回 1999.6.19 浅香昭雄
双生児研究あれこれ 《NL26号》
- 第10回 1999.11.13 早川和生
老化現象の双生児研究 《NL27号》
- 第11回 2000.5.27 飯田 真
うつ病の双生児研究 《NL28号》
- 第12回 2000.10.21 野中浩一
多胎児出産率とその変動要因について ～胎児期環境学に向けて～ 《NL29号》
- 第13回 2001.5.19 志村 恵
文学に現れた双子・多胎児 その広大なイメージャリィ 《NL30号》

- 第14回 2001.10.20 加藤則子
自由集会と体重解析で多胎児支援に貢献できたか《NL31号》
- 第15回 2002.6.15 菅原ますみ
双生児の個性の発達に関する発達心理学的研究：縦断的調査から
- 第16回 2002.9.21 大木秀一
双生児の卵性診断について



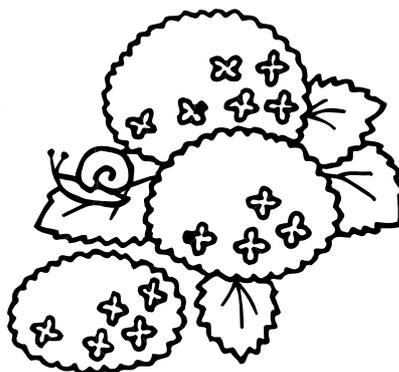
国際双生児研究会議

International Congress on Twin Studies

(今泉洋子 作成)

開催・年次、大会会長、開催地、学会長(就任年次)

第1回	1974	L. Gedda	ローマ	L. Gedda
第2回	1977	G. Allen	ワシントン DC	G. Allen
第3回	1980	L. Gedda	エルサレム	I. McGilivray
第4回	1983	D.W. Fulker	ロンドン	W.E. Nance
第5回	1986	AW. Eriksson	アムステルダム	A.W. Eriksson
第6回	1989	L. Gedda	ローマ	井上英二
第7回	1992	井上英二	東京	J. Eaves
第8回	1995	J. Eaves	リッチモンド	R. Derom
第9回	1998	J. Kaprio	ヘルシンキ	E. Bryan
第10回	2001	E. Bryan	ロンドン	L. G. Keith and D. M. Keith
第11回	2004	未定	デンマーク	



平成14年度 日本双生児研究学会 第1回幹事会

日時：2002（平成14）年1月26日（土） 12:00～12:50

場所：兵庫大学

議事次第

I 報告事項

1. 平成13年度 活動報告

1) 第15回学術講演会の状況報告は以下の通り

参加者数 62人

発表件数

一般講演 13件

ワークショップ 1件

シンポジウム 1件

2) 研究会

5月19日 志村恵氏（金沢大学文学部）

文学に現れた双子・多胎児 —その広大なイメージリイ

10月20日 加藤則子氏（国立公衆衛生院 母子保健学部）

自由集会と体重データ解析で多胎児支援に貢献できたか？

3) ニュースレター 第29号、第30号を刊行した。

2. 会員状況報告 現会員数 158人、退会者数 13人 新入会員数 3人

II 協議事項

1. 平成13年度 決算・会計監査報告 表1参照

2. 平成14年度 予算案検討・承認 表2参照

3. 平成14年度 活動計画

1) 第17回学術講演会について

平成15年1月25日（土）

末原則幸氏（大阪府立母子保健総合医療センター）を大会長として

2) 研究会 6/15 菅原ますみ氏（お茶の水女子大学）

9月 大木秀一氏（東邦大学）

3) ニュースレター 第31号、第32号の刊行を予定している。

4. 平成15年度学術講演会幹事候補校の検討

野中浩一氏（和光大学）が候補としてあげられたが、決定は保留となった。

平成14年度 日本双生児研究学会 総会 議事録

日時：2002（平成14）年1月26日（土） 13:00～13:25

場所：兵庫大学

議事次第

報告事項、協議事項とも幹事会と同じ

平成14年度 日本双生児研究学会 第2回幹事会 議事録

日時：2002（平成14）年6月15日（土） 16:00～17:00

場所：慶應義塾大学三田キャンパス 大学院棟312番教室

出席：浅香、天羽、安藤、今泉、大木、小野寺、加藤、野中、末原

欠席：早川、岡崎、又吉、杉浦、吉田

報告・協議事項

1. 兵庫大会のワークショップについて

第16回学術講演会のプログラムに記載がなかったワークショップ「多胎児支援グループを継続させるためには、どのような援助、方向づけが必要か」を、公式の行事として追認し、記録に残すこととした。

2. 次期会長（2003-2004）の選出について

今泉洋子氏が次期会長に推薦された。

規約により、2003年度の総会にて決定される。

3. 第17回学術講演会（2003年度）について

平成15年1月25日（土） 10:00～17:00

大阪市立総合医療センター さくらホールにて

一般演題（募集）のほかに2ワークショップ「多胎妊産婦を支える」「多胎サークルの将来像」が予定されている。

4. 第18回学術講演会（2004年度）の開催地について

詫摩武俊氏に依頼することにし、該当年度の会長が折衝することとした。

なおこれ以降の候補として 志村氏（金沢大・2005年）、野中氏（和光大・2006年）があがった。

表1 日本双生児研究学会 平成13年度(2001.1.1～2001.12.31) 会計収支報告

収入		支出	
費目	金額	費目	金額
前年度繰り越し	1,920,479	研究会謝礼・交通費	45,000
会費収入	379,000	事務用消耗費	87,586
平成8年度分	1 3,000	ニュースレター編集費	
平成9年度分	1 3,000	12年度未払い分	100,000
平成10年度分	1 3,000	13年度分	50,000
平成11年度分	7 21,000	事務局人件費	64,420
平成12年度分	28 84,000	通信費	111,040
平成13年度分	84 259,000	第16回大会開催費補助費	100,000
平成14年度分	2 6,000	学会特別講演補助費	100,000
その他(利子)	1,544	支出合計	658,046
		次年度繰り越し金	1,642,977
合計	2,301,023	合計	2,301,023

表2 日本双生児研究学会 平成14年度(2002.1.1～2002.12.31) 予算案

収入		支出	
費目	金額	費目	金額
前年度繰り越し	1,642,977	研究会謝礼・交通費	50,000
会費収入	330,000	事務・消耗費	20,000
(110人(=158*0.7)*¥3,000)		会議費	30,000
その他(利子)	1,000	ニュースレター編集費	50,000
		事務局人件費	60,000
		通信費	90,000
		第17回大会開催費補助費	100,000
		支出合計	400,000
		次年度繰り越し金	1,573,977
合計	1,973,977	合計	1,973,977

次回研究会のお知らせ

2002年 9月21日 (土) 13:30-16:30
東京大学医学部教育研究棟13階1304号

大木秀一氏 (東邦大学)

「双生児の卵性診断について」

編集後記

◆ 梅雨の季節というのは、心身とも活動性が減退しがちですが、6月15日の研究会は、魂に清水を浴びるすがすがしい思いでした。菅原ますみ先生のお話が聞けたからです。先生のグループの快挙は本研究学会で周知のとおりです。『プロミンが行動遺伝学の優れた研究は行動遺伝学以外の分野から現れるという予言をしているが、この研究はまさにそのいい例だ』という安藤先生のコメントが印象的でした。

7月始めの国際学会を控えてのあわただしい中で、編集の追い込みもこなしていただき、大木先生、大間さんにはご苦勞をおかけしました。この場を借りてお礼申し上げます。

(加藤則子 kato@iph.go.jp)



◆ 期せずして今回のニュースレターの内容は、多胎児の育児支援に関する原稿が集中しました。また、学術講演の変遷を概観しても、当初の「双生児研究」のニュアンスから最近では、「育児支援」に関する内容の比重が、確実に大きくなりつつあるように思います。これは、この学会の大きな特徴です。加藤則子先生がお書きになっているように、常に研究と支援と言った二つの視点を持って活動していくスタンスは非常に重要なのではと改めて感じてしまいます。双生児研究のようになかなか対象が得にくい場合には、このような点が特に要求されるのかもしれない。

(大木秀一 syuo@med.toho-u.ac.jp)



ニュースレター

日本双生児研究学会 発行

編集：ニュースレター編集委員会 (責任者：加藤則子・大木秀一)